

文

化

新しい本

矛盾と残酷さ批判
▼「死刑を問う」
(ジャン・トゥーラ著)
戸口民也訳



「死刑を問う」の表紙

長崎新聞 1991.2.24.

著者は、フランスの作家で神父。これまで一貫して人間の尊厳と生命の尊重を訴え続けてきた。だからこそ核兵器、安楽死などに反対しており、死刑の矛盾と残酷さも徹底的に批判する。ジャーナリストでもある著者の問題提起は鋭く、説得力がある。

同書は死刑賛成派、廃止論者の意見を取り上げたうえで、言葉のあいまいさのため、無実の人が断頭台に送られたケースなどを紹介。「無実の人を死なせることほど不幸な間違

ではない。千人の罪人を無罪とするほうがまだましである」と語った先人の言葉をかみしめるべきだと強調している。

著者は「フランスでは一九八一年にギロチンは廃止されましたが、廃止反対派は死刑の廃止は犯罪の増加をもたらすと予告していましたが、その

(三)書房、四六判、三〇九
ページ、二七〇〇円)

じだらう。にもかかわらず、日本のように、死刑を存続させている国が多い。

死刑存続の最大の根拠は、それが凶悪犯罪の抑止につながっているからだという「抑止力の理論」である。しかし、この本を読んでみると、そうした漠然とした感じがいかに根拠のないものであったかが分かる。

死刑に対するセンセーション的報道が大きな要因になつたに違いない。そうした感想の根底にあるのは、

犯罪はどんどん凶悪になり、女性が手を下すものも

今年に入り、最高裁で戦後的新しい刑法が施行され、から、なおかつ死刑が廃止

されるべきことを政治的、宗教的、倫理的側面から理

論づけている。その筆致は極めて実証的で、キリスト教の祭司という宗教的な臭みからは程遠い。それにしても死刑の存続が日本で歐米ほど議論されないのはどうしたわけだらう。

妊娠中絶が生命の尊厳と

論されない風土では、死刑も自明の理として議論の対象にはなり得ないといふことなのだろうか。

統計を見たわけではない。著者は死刑に賛成する立場の声にも十分耳を傾けた。この五人目という報道

を聞いたとき、「ずいぶん少

ないな」というのが正直な感想だった。恐らく似たような感想を抱いた人は多かつたに違いない。そうした感想の根底にあるのは、

犯罪はどんどん凶悪になり、女性が手を下すものも

その中でフランスをはじめ

が、恐らく事情は日本も同

様の声にも十分耳を傾けた。

統計を見たわけではない。著者は死刑に賛成する立場の声にも十分耳を傾けた。

(三)書房、B6判、三〇九、二七〇〇円)

ジャン・トゥーラ著、戸口民也訳

死刑を問う

今年に入り、最高裁で戦後的新しい刑法が施行され、から、なおかつ死刑が廃止

されるべきことを政治的、宗教的、倫理的側面から理

論づけている。その筆致は極めて実証的で、キリスト

教の祭司という宗教的な臭みからは程遠い。それに

しても死刑の存続が日本で歐米ほど議論されないのはどうしたわけだらう。

妊娠中絶が生命の尊厳と

論されない風土では、死刑も自明の理として議論の対象にはなり得ないといふことなのだろうか。

(三)書房、B6判、三〇九、二七〇〇円)